

魂 プロの背中

5月18日正午過ぎ、眼科医の服部匡志(47)は東北新幹線で福島・郡山から盛岡に移動した。今日は谷藤眼科医院で5件の手術を請け負う。服部は駅前でトンカツを食べ、気合を入れた。ベトナムで無償医療活動中、東日本大震災が起き、3月下旬に帰国後、「ボランティアを」と考えたが、4月早々のベトナム入りがすでに決まっていた。その出発直前、活動の手伝いに同行予定だった若い医師がキャンセルを伝えてきた。「日本が大変な時に国際ボランティア

震災迷い断ちベトナムへ

どころでは……」。服部は胸を突かれた。被災地に行くべきだったか。

すっかりしないままベトナムに渡り、北部のトゥエンクアンで、服部は、両目に白内障を患

海を渡る赤ひげ ⑥

手術室で顕微鏡をのぞき込む服部さん。視力を取り戻した患者の笑顔を見ることが最高の喜びだ(18日、岩手県盛岡市で)



ご感想を、〒530・8551(住所不要)読売新聞大阪本社社会部へお寄せください。ファックスは06・6361・0733、メールはosaka2@yomiuri.comです。

う男児(10)に出会った。「学校の黒板の文字が全然読めない」と沈んでいたが、手術で視力が0.8まで回復した。翌日、うれしさのあまりきょうだいとふざけ合う男児を叱りつつ、服部は、喜びがこみ上げてきた。

「やっぱり僕は、この国でこんな瞬間に出会うために医者をやっているんや」

日本で被災地支援をする人は、幸いなことに大勢いる。だがベトナムの田舎を毎月訪ね、貧しくて病院に行けない失明寸前の患者に無償で手術をする人間は、自分一人だろう。この男児のような人がベトナムにはまだ、ごまんといる。だから、彼らのためにこの国を巡り手術を続けよう。震災以来、揺れていた服部の心が定まった。

盛岡・谷藤医院の5人目の患

者は網膜動脈瘤破裂だった。

網膜硝子体手術で世界レベルの腕を持つ服部は内視鏡を巧みに操り、難手術を成功させると、次の手術地、和歌山に向かった。

日本で手術を請け負う8病院を2週間で巡り、残りの2週間はベトナムという生活が今後も続く。日本に残る妻(47)と過ごす時間はほとんどないが、「困っている人を助けたい」という信条を理解してくれている。

大阪行きの機内で、服部はスケジュール帳を開いた。

「視力の回復とは、失った世界を取り戻すこと。その手伝いをさせてもらっていると思うと、僕は本当に燃えてくる」

服部はそう話すと、ベトナム行きを予定を年内分までと書き込んだ。(敬称略、おわり)

社会部 田原徳容